

保育の父・佐竹音次郎に学ぶ会 会報34号

— 2026, 1, 14 発行 — (担当: 中平菊美)

新年を迎えました。皆様にも、本会にも、何事も「午^{うま}」くはこぶ年になることを祈る次第です。本年もよろしくお願い致します。

○内容

- 1、報告「資料の保管場所が決まる」
- 2、四万十町に「聖愛一路」等の図書を贈呈
- 3、2月14日の勉強会「佐竹十太郎について」のご案内
- 4、2026年度総会に関して
- 5、読み物シリーズ23「鎌倉保育園の人たち ① 仙葉秀堅」

1、報告「資料の保管場所が決まる」

今年度、資料の保管場所探しが一つの課題となりました。

そこで、音次郎会のこれまでを見守ってきてくださった方々に相談をしたところ、適切な場所を考えてくださると共に、場所の責任者に下話もしていただいた上に、音次郎会がお願いに伺う段取りまでしていただきました。

そのお陰により、お願いに伺うと許可していただき、10月7日と14日で大まかな品々の引っ越し作業はできました。まだ完全ではありませんし、引っ越しした資料の整理整頓もできておらず、次年度に取り組むべきことの一つとなっています。

保管場所決めや引っ越し作業にご協力をいただきました皆様に心から感謝しています。

2、四万十町に『聖愛一路』等の図書を贈呈

御承知いただいているように、音次郎会の最大目的は「佐竹音次郎をたくさんの方に知っていただくこと」で、その為に「資料の収集や作成、勉強会、啓発紙でもある会報発行、小学校卒業生への音次郎関係図書『万人の父になる』の贈呈、関係図書や資料の頒布、授業や講演等への協力」等を行っています。

そうした取り組みの中で、『感動を共に！私の佐竹音次郎伝』と『聖愛一路』

を読まれた四万十町の方から、次のような言葉が届きました。

「2度、3度と読みました。自分は小さい頃に大陸に住んでいたのですが、厳しい寒さをはじめとした過酷な状況を思い出します。そんな時代に音次郎さんのような取り組みがあったことを知り大変に驚きました。また、一つのこと長年かけて取り組む生き方に心打たれました。これらの本はできるだけ多くの方にも読んでもらえると良いと思い、知りあいの町職員の方に働きかけようと思っています。」

そのお気持ちを大事にさせていただきたいと思います。ただ、ご連絡くださった方が、交通不便な山奥で、しかも車の運転ができない高齢の方であることを考え、町への働きかけは音次郎会でも行わせていただくことにしました。

12月5日、四万十町長さん・副町長さん・教育長さん・生涯学習課長さんに時間をいただき、「多くの町民の皆様にご覧いただけるように図書館等に置いて頂ければありがたいのですが、」と『聖愛一路』『感動を共に！私の佐竹音次郎伝』『万人の父になる』を複数冊ずつ贈呈させていただきました。

お一人の「たくさんの方にも読んでもらいたい。」「そうなるように働きたい。」との言葉ではありましたが、私たちの社会が大事にしないといけない大事な心だと思えます。また、音次郎会の願いと合致することでもあると思えます。

贈呈の本を四万十町のたくさんの方々に読んでいただき、佐竹音次郎を知っていただけることになれば嬉しいですね。

3、2月14日の勉強会「佐竹十太郎について」のご案内

・2月14日（土）午後1時30分から、「しまんとぴあ」にて。

・あらまし

①大正12年4月9日、鎌倉にて音次郎の長女里が男子を出産

②同日、男子の父である満鉄図書館勤務の英治に出産を知らせ、命名を依頼

③同月11日、音次郎夫婦と里で男子に「十太郎」と命名

○どんな思いを持って「十太郎」と命名したのかを、日誌の記載を基に推測してみます。

4、2026年度総会に関して

4月1日から2026年度になります。その総会は例年5月10日前後に行われてい
ますが、現時点では月日は決まっています。
内容は「2025年度の活動や会計等の報告、2026年度の役員や活動と
予算の決定
等」です。
総会后に、会報35号で主な事柄についてはお知らせさせていただく予定で
す。
以上具体的なご案内にはなりません、参考までにお知らせを致します。

5、読み物シリーズ23「保育園の人たち ① 仙葉秀堅」

○音次郎の保育園がどのようなものであったのかが分かる為には、保育園に暮
らしていた人たちを知ることが一つの方法だと思います。
今回は「聖愛一路」にも度々登場してくる仙葉秀堅さんを取り上げたいと思
います。

●仙葉秀堅

旗本として彰義隊に参加し上野戦争で戦う。維新後世をすねて浮浪し、心
配した知人が
「佐竹さんなら何とかしてくれるだろう。」と連れてきた。やがて会計を担当
し、財団法
人理事補となり、大正13年退職にあたって神奈川県知事から表彰された。

(以下、聖愛一路P215より)

保育園の宝物爺さんと呼ばれた仙葉老人は、昨年4月まで36年の長い年
月をここに暮らしてきた。

彼は保育園がまだ腰越の時代に、天涯孤独の身の行く末が案じられると、寺
男だった身を音次郎のもとに寄せたのが、そもそもの機縁となり、ある時は子
どものお守やら台所の手伝いなどしてきたが、鎌倉へ移ってきてからは会計を
受け持つようになった。

ところがなかなか因業な爺さんで始終家の者たちと喧嘩をしては音次郎を
こまらせたものだが、それでも80になるまで会計の職を退こうとせず、それ
こそ最後まで忠勤を励んだのである。

彼が会計系の時代は極度にひっ迫した財政状態だったので、人知れぬ苦心も
多く、彼はいつも金庫が空になると部屋で布団を引き被ってじっと動かなくし

ていた。それで、子どもたちまでが、「今日は仙葉のお爺さんが布団を被っているからお金がないんだよ。」と承知して、食物が例え足りなくとも、ちゃんとあきらめていた。

80を越えたらさすがに身体のほうが効かなくなったので、無理やりに仕事を辞めさせ、日当たりの良い一室を彼のために提供し、老後を温かく労わってやることにした。音次郎にとっては共に苦難の道を歩んできたいわば戦友なのであるから、それだけに彼を愛する気持ちは深かった。

96になってもなかなか元気で、毎日食堂や事務室にのこのこやってくる仙葉老人の血色のよい顔を見ては、百までは大丈夫だろうと言い合い、自分でもそのつもりでいたらしかったが、昨春4月枯れ木の倒れるように逝ってしまった。

思えば広い世界に全く一人ぼっちのお爺さんでもあったが、賑やかな子どもたちの声を聞きながら永年住み慣れた園で、馴染み深い人々に親切に看取られて逝ったことは彼にはこの上もない幸福であった。

< 私見 >

音次郎の「保育園」は、幼い子どもを念頭に置いての命名だったとは思われますが、年齢を問わず、自力で家庭生活や地域社会生活が困難な人たちを受け入れています。

音次郎は「保育」という言葉をどうとらえていたのでしょうか。

音次郎の「保育園」の特色は、この「とらえ」にあるように思います。

☆「皆様、お体に気をつけてお過ごしください！」